魂の教育者、下村湖人と『次郎物語』

秋　山　達（さと）　子

フランスの作家のマルセル・プルースト（1871～1922）は，その著『失われた時を求めて』の中で，「一生にただ三冊か四冊の本が本当に重大な何かを人に与える」と述べているが，下村湖人の『次郎物語』も，そのような意味で，多くの人にとって一生に何度も味わうことのできないような深い印象を残すものではなかろうか。このような本との出合いはしばしばその人の生涯の基盤となる考え方を作りあげるような貴重な体験となるであろう。

プルーストは当時の実証主義的な考えとはまったく方向を異にするもう一つの考え方，外界にある物質的なものの合理的な解釈では理解し得ない心の内的な世界，すなわち，自我の根底に潜む人間の自由な魂のあり方を探究した人であった。そして新しい意味での，「心理小説」の分野を開拓した人といわれる。『次郎物語』は，もちろんプルーストのものとは，まったく社会的背景を異にしているが，しかし、同じような意味での新しい「心理小説」として，重厚な風格を持つもののように感じられる。しかし，ここでいう「心理小説」とは，実は現在行なわれている心理学とは特に関係がない。また，おそらく現代の多くの教育学の諸流ともあまりかかわらないのではないかと思われる。いわゆる大学で教える心理学や教育学の大部分のものには，依然として19世紀のコント以来の実証主義哲学の影響が強くみられる。しかし，それは物事の一面の真理を捉えているのにすぎないのであって，人間の行動のほとんどは，むしろ，一人の個人の内的な世界における動きによって決定されるといっても過言ではないであろう。人間の持つ内的な心の深さの問題が，最近あまり返りみられなくなっているのは残念である。

たとえば，心理学の場合には，ねずみなどの小動物を使った行動の観察や実

験がアカデミックな心理学の研究の主流となっている。ねずみの実験そのものは，客観的な科学的研究の一手段として，決して間違っているわけでも，悪いわけでもないが，その結果をそのまま教育，心理の場に持ち込んだ場合，表面からみた行動という人間のただ一面のみを捉えるだけとなり，本来，自ら思考する動物である人間の主体性が欠落してしまう。仮にそのような方法による自我や主体性の確立ということも考えられないわけではないが，それはやはり，外から規制されたものであって，本当の意味での人間の自発性は抑圧される。そして長いこと，この人間の内的な世界への探究という実証主義と鋭い対比をなす一面も，学問の歴史の中で抑圧されてきたように思う。『次郎物語』の持つ大きな意義は，まさにこの自己の内的な世界への探究と，魂の解放というこの現代の実証主義的な学問の盲点をついている所にあるのではないだろうか。

今回，特に『次郎物語』についてという課題を与えられて，私ははじめてこの有名な作品に接することができた。この下村湖人の著作は，年齢的にはもっと以前から，私が当然かかわっていてしかるべき作品であったろう。大正12年生まれの私にとって，この作品にあらわれる青年たちは，ちょうど結婚や恋愛の対象となる年令の人たち，たとえば，うちの兄の親友とか，友人の恋人たちと同時代であり，彼らが経てきたその同じ道を歩いている。事実，私にとって2.26事件はかなり強い印象となって記憶に残っているし，また，身近な青年たちの間には，思想問題で次々と官憲に追われる身になった人たちもいた。それで今さらながらこの作品を読んで，当時が懐しく感じられたが，その頃，私がこの本と接する機会を持たなかったことには，まづ第一に，この作品が最初に発表された当時の私は，かなりの外国かぶれであり，ここに色濃くあらわされている日本的情感を意識的に避けてきたという問題があろう。また，その後，あらためてこの著作がテレビなどで大きく再評価された時にも，私は外国で生活することが多く，名前を知るのみで今日まで，親しく下村先生の作品に接することがなかったようなわけである。

こうしてはじめて『次郎物語』に接してみて，一番大きな印象は，これが，たとえばベルグソンの哲学，あるいはプルーストの作品におけるような意味での「心理小説」であるという点である。もちろん，下村先生の著作に対して，外国の哲学者や作家の名前をあげることは恐縮ではあるけれども，これが内的な探究という意味で，単なる小説であることを越えて，世界の思想界とつながる意味を持つということをわかって頂きたいと思うからであって，他意はない。また，「心理小説」といっても，この著作はいわゆる心理学者には縁がなく，同

じ心理学の分野でも，特に臨床心理，心理療法，カウンセリング，精神分析などの実際に人間の心の悩みに直接かかわる人たちにとって，重要なものであり，また，そういう人たちでなければ，なかなか理解し難い内容を持つものと思う。

次に非常に強い印象として，この著作は，世界の思想界につながる普遍的な意味を持ちながらも，なおかつ，強烈に日本的であって，日本的な風土の中でのみあらわすことのできるものを持っているということである。それは，もちろん，近代日本史の一頁として書かれるべき，数々の実際に起こった事件を背景としているからでもあるが，それよりもむしろ，そこには日本人の心の底に流れている，日本固有の宗教的原型のようなもの，そういうものに明確に裏付けされているからであろう。それはまた，この著作が表現の方法として，日本の文学には伝統的な，私小説的な雰囲気を持つことからも感じられる特徴である。

しかし，これは単なる「私小説」でも，また「心理小説」でもない。『次郎物語』について，その文学的評価はともかくとして，たとえば児童心理の発達理論とか，フロイトの幼児期の性欲説やエディプス・コンプレックスをこれと関連づけて語ることは，それほど難しくはないであろう。しかし，この背景にある普遍的な思想と，日本的風土の中に築かれた宗教観を考えると，それだけでは，とてもこの作品全体について語り尽くすことはできないように思われる。さらにここには，より具体的で実際的な，子どもの立場からの，情緒的な問題が見事に書きあらわされていて，その点からは，子どもの複雑な心情を知る意味で大きな意義を持つものであると思われる。特に『次郎物語』の一部，二部，三部あたりまでは，若い人自身が読むよりも，むしろ，御両親や先生方に読んで欲しいと思う所が多い。登校拒否，情緒障害，極端な形では自閉症の問題などが最近，大きな問題となっているが，これらの子どもたちの特有な，屈折した心のあり方，あとなの立場からみて一見，まったく理解し難い態度が，ここにはかなり明確に子どもの側からの考えとしてあらわされているように思う。

子どもは，私の本来の考え方からいえば，小学校の低学年くらい迄は，遊んで暮らすのが，もっとも自然なあり方であると思う。その遊びの中から，子どもたちは自分自身の考えや生活態度，将来の方向などを見出しておとなになる。ところが現在のように，幼稚園から進学ということを頭において育てられると，遊び仲間との間のつきあいとか，数々の試行錯誤の中で育つべき主体性が未発達のままに終わってしまう。子どもはいかに小さくとも，一個の人格であり，「一寸の虫にも五分の魂」というように，それぞれの個性があり，特長があっ

て，それが遊びの中で次第に磨かれ，成長する。最近，いわゆる情緒障害児とよばれる子どもたちと話していて，彼らの誇り高く純粋な魂が，いかにねじまげられ，傷つけられているかを痛感することがある。特に一部と二部には，多感な次郎の心情を通して，この辺の事情が非常に詳しく表現されているように思う。

主人公の次郎の家庭環境は，今日の一般的日本人の家族構成から考えると，信じられないほど複雑であり，特に幼時期の大家族主義的な正木家のあり方などは，今日，もし我々が問題児を前にして，このような家庭の背景を聞いただけで，すぐに問題は家庭にあると断言してしまうのではないかと思われるほど難しい。しかし，それにもかかわらず，次郎はその中でもまれながら，見事に成長する。ある意味では，むしろ，その家庭環境の複雑を故に，かえって，次郎は立派な青年となってゆく。この辺に，この作品が，なんでも家庭環境のせいにして安易に片づけようとする今日の臨床心理学の盲点をついている所があるようにも思われる。たとえば，今日の幼児教育の基本とされている母子関係にしても，生まれて間もなく母親から離され，当然の如く乳母にあずけられることとか，すでに母と乳母という母親のイメージの分裂がある上に，さらに継母があらわれるというややこしく，これでは子どもにとって一番大切な母親のイメージは定着することがなく，常に浮動的にならざるを得ない。しかし，次郎は苦しみながらも，これらの多層的な母親の存在を，自分の心の中の母なるもののイメージへと統合してゆく。

また父親の問題にしても，ここには，今日では信じられないような権威的な父親像がみられる。これほど大きな父親の権威というものが，かっては実際にあったのかということを改めて感じさせられるほどである。しかし次郎は，その父親の権威に抑圧されることもなく，依存的になるのでもなく，そこから兄弟愛を育て，さらに師弟愛を生みだして，最終的には，すべての家族的な葛藤を自己の中に統制する。この次郎のあり方をみていると，どのような環境にあっても，その子どもが自分自身をみつめる目を持っている限り，いつまでも成長，それぞれの環境の中で，自分を育ててゆくことができるのだということを強く感じさせる。『次郎物語』が，現在でも，かなり多くの若ものたちを魅了するのは，彼らが，次郎の生涯のどこかで自分と同一視できる点を見出すからではないだろうか。ここにあるのは，日本における特殊な家庭的背景を越えて，ほとんどあらゆる人間の，母親の問題であり，父親の問題であって，そこに教育というものが，単なる外面からの環境調整だけでは十分ではなく大きな確証がみ

られるように思う。次郎はナイーヴな感受性の強い少年であったが，どのような子どもでも，多感でナイーヴな素質を持つものは，たとえどんな家庭環境にあっても，多かれ少なかれ，次郎と同じような問題に苦しむのではないだろうか。ここに『次郎物語』が持つ，単なる実証主義の枠を越えた普遍的な教育理念としての完成がみられる。そこには次郎という一人の個人とその環境を越えて，あらゆる幼時期から思春期にかけて人間の問題があり，たまたま，幸福な環境にあり，特に問題を意識せずにこの時期を過ごす多くの子ども，または若ものたちも含めて，常に人間の成長の背景に渦巻く深層心理の表現があるように思う。

多くの人間は，この深層にある心の問題に気がつかずに通り過ぎてしまう。あるいは，たとえその複雑な心情の一部分を幼時期，または思春期に体験したとしても，日常的なおとなの，忙しい生活の中で忘れてしまうことが多い。しかし，どんなに呑気に楽観的に育ったとしても，深層に流れる大きな情動の源泉，たとえば「母なるもの」とか，「父なるもの」などの複雑な問題は抱えているわけで，ただ，自分が気がつかないだけである。そのために『次郎物語』は，どんなに無視しようとしても，心のどこかにひっかかるものがある筈であり，ましてや，自分自身がいろいろな問題に実際にぶちあたり，それをかなり明確に意識して成長してきた人にとっては，この作品は忘れられぬ感銘を与える筈である。事実，私は現在つきあっているいわゆる情緒障害児，あるいは問題児たちに聞いてみたが，彼らの全員がこの作品を読んでいたわけでなく，多くは，テレビでみたことがある程度であったが，これまでになんらかの意味で自分の中に問題を感じていたものたちはすべて，『次郎物語』に大きな共感を持っていたようであった。そういう意味からは，子どもはなにも問題を持たずに無事に成長するよりも，むしろ，実際に問題を惹起したり，あるいは少なくとも，自分の中に問題の存在を感じるものの方が，長い生涯を考えると，かえってより良く，より深く人格を成長させるということもいえるかもしれない。

このような深層心理学的な見方からすれば，『次郎物語』が，高度に洗練された深い意味での教育理念を含んでいることは明らかである。しかし，当時，特に深層心理学というような学問が日本のみならず，世界的にもまだ確立されていなかった時代に，下村湖人は，どのような動機から，この作品を書いたのであろうか。勿論，彼自身の人生との葛藤，哲学的な思索などから得た体験的なものが背景になっていることはいうまでもない。しかし，その貴重な体験の結果として，そこに生まれたものは一種の宗教的な人生の基盤であったと思われ

る。日本における宗教は，その一部は日常的な慣習上のものであり，またその一部は，宗教というよりむしろ哲学的な思索であり，また，その一部はより倫理的な含みを持つ人生の指針のようなものであって，ここで宗教という言葉を使うことは誤解が多いかもしれない。しかし，それはたとえば，C・G・ユングが，心理的葛藤をどこまでも追いつめてゆく時に，最後に到達するもの，それは背理的なヌーメン（霊性）である。という時と同じ意味での宗教である。そしてここにこそ『次郎物語』の一つの教育理念としての普遍性と，さらにそれを越える独創性がみられるように思う。そして，その世界は，私にはなによりも親鸞の世界に通じるものがあるように思われる。その究極的な基盤は，禅の悟り，あるいは少くとも禅的なものとしても捉えられないこともないが，やはり，常になまな愛情のぶつけ合い，心情的な相克の中から生まれたこの作品における悟りと密接につながるものは『歎異抄』の持つ世界ではないだろうか。下村先生は最後には，自分の中の愛情の相克に徹し，その苦しみ，その迷いの中にこそ救いがあるという親鸞の世界に入ってゆかれたのではないだろうか。そうしてはじめて，この『次郎物語』のような，赤裸々な作品が生まれたものと思われる。また，その悟りの中である意味では深層心理学をもはるかに越えるような，人間の心の見事な描写が生まれてきたようにも感じられる。それはあらゆる既存の理論を越えて，生きることに徹した一人の天才の姿があり，そこには普遍性の中の個有性という背理的な輝きがある。C・G・ユングは，人間の無意識の根底に，大きな普遍性を持つ集合無意識の存在をあげている。そして人間がその内的な探究を深め，この集合無意識の存在を自覚し，それを自分の自我の中に統合することによって，はじめて真の意味でのその個性が確立され，自己の個有性を輝かすことができるのだという。『次郎物語』は，このような集合無意識的な「母なるもの――グレート・マザー」，または「父なるもの――オールド・ワイズ・マン」との心理的葛藤を通してある少年が，次第に自己の個性を確立してゆく話であり，その背景には，非常に日本的な，かつ宗教的な基盤があるというように考えても間違いではないように思われる。

さて，このように『次郎物語』について述べてきさが，実は，私にとってこの作品を読み通すことはかなり苦しいことであった。戦前，戦後を通じて，ここに書かれていることは，かなり身近な世界であったにもかかわらず，私にはほとんど体質的といってもいいような，この作品に対する異和感がつきまとった。その一つは，私が日本における「私小説」的な伝統を決して好まない点にもあると思う。この作品にあらわされている愛情のあまりにもなまなましい表

現は，私にはほとんど受け入れ難いものがあった。勿論，またそれ故にこの作品を愛し，この作品から強い感動を受ける人も多いであろう。幼時期から青年期にかけての母子関係の葛藤の描写にも，しばしば眼を覆いたくなるような情景が描かれていたし，後半の密着した師弟関係の中にも，私にはとてもついていかれないろうな，なにものかがあった。このような師弟関係は，長い間，日本の伝統の中に一つの典型として引き継がれてきたものがあろうと思う。その関係は，ある意味ではすばらしいものであるが，同時にどうしてもそこに客観的な冷静さを欠く短所があり，アカデミックスな世界のみならず，政治にも経済にも，派閥を作り，徒党を組むという悪弊を生んできた。しかし，ここで私はその是非を云々する資格はない。これは日本だけのことではなく，世界的な現象であり，私にはただ，性格的な相違から，この傾向を好まないというより他は表現のしようもないものである。

それはまた，しばしば男性に特有の世界にあらわれるものであり，男同士の争いとか，男の友情という形で表現されることが多いが，そこには女性にはうかがいしれない，ほとんど膚の臭いが感じられるような男性の密着した間柄がある。これは女性の私にはまったく理解し難いものであった。もっとも，これもまた，男女の問題を越えて，性格の相違として考えてもよいかもしれない。同じ日本の宗教といっても，道元の世界もあれば，親鸞の世界もあるわけで，私が下村先生が究極的に依って立たれた基盤は，たとえこの作品に良寛の言葉があらわれ，禅の境地が語られていたとしても，それはやはり親鸞に近いという理由もそこにある。この作品を読んで，そこにすばらしい内的探究の世界を発見し，同じように心の内的な世界にこそ真実があると感じる点で，私は大きな共感を覚えたが，同時に，そこにあらされた世界は，私とは異質のものであったことは認めざるを得ない。このような作品に対して，ほとんど体質的にかなわないと感じる人もあるということは，わかって頂きたいものと思う。

この問題は一心理学者として，多くの人に接しているうちに次第にわかってきたことであり，この性格的な相違については，いずれなんらかの形で発表したいものと考えている。たとえば，芸術作品などについて，人はそれぞれ好みがあり，ある作家は好むけれども，他の作家はいかに偉大だとしても，素直に受け入れ難いことがある。『次郎物語』には，たまたまミケランジェロについて語られている所があるが，ルネッサンスの二大芸術家として対比的にあげられるのは，ミケランジェロとレオナルド・ダ・ヴィンチであろう。ミケランジェロが激しい愛憎の世界に生きた人であることは，個人的な書簡や，また，彼の

作風からもうかがい知ることができる。これに反して，ダ・ヴィンチは，そのような人間の葛藤の世界を越えて，むしろ，永遠の世界への飛翔というようなことを常に考えていた人であった。このように同じルネッサンスの世代に生き，共に後世まで長く作品を残した天才でありながら，その依って立つ思想も，性格もまったく異なっていた。この場合に，私は人生のあり方からいっても，作品からいっても，ダ・ヴィンチ的な存在に属する方の人間であって，その点で，あまりにも情愛の深い下村湖人という人の，人格にはもう一つ，そのままでは消化しきれないものを感じることを許して頂きたいと思う。

そういう意味から，下村湖人の『次郎物語』について私が述べることは，多分にミスキャストではなかったか，というような気がする。しかし，より広い視点に立って考えれば，あまりにも人間を機械の如く扱う現代において，「魂の医者」と呼ばれたユングの心理学を学ぶ私が，同じく「魂の教育者」であったと思われる下村湖人の作品について語ることは，決して間違いではなかったかもしれない。

補　足

今回，私に与えられましたテーマは，本文でもふれましたように，実は私には難問題でした。『次郎物語』の中には，数々の感銘深い情景の描写がありましたし，今日でも，どちらかという内向的で，友人の少ない，一人で本を読みふけるような青少年の心を打つものが豊富にあると思います。また，精神分析を専門とする私にとって，次郎の複雑な環境，特に分散した母親のイメージを，苦しみながら一つのものに集約して，自分の心の中にまとめてゆく過程は非常に興味がありました。また，今日では事情が異なるとはいえ，次郎のような感受性の強い，難しい子どもの心理を知って頂くために，教育者には是非一読をすすめたいものとも思います。

この作品の中で，もっとも大きな基調となっているものは，やはり下村先生の宗教観でありましょう。情愛的なものはさらけだして書いておられるその根底に，私は生きることを苦としてとらえ，苦集滅道の四諦による一種の仏教的な悟りの世界をみるようにも思いました。私自身が曹洞宗の寺に生まれ，仏教学や宗教学を学んで今日までまいりましたので，この点を痛切に感じました。

しかし，現代の若ものたちに，この著作を読むように直接に勧めてみて，はたしてどのような反響があるかは疑問に思われます。次郎の育った環境は，今日の都会志向的で，核家族制を主にした一般家庭のあり方からは，あまりにも遠いものではないでしょうか。大家族制度が崩壊しつつある歴史的背景の中で，

テレビやマンガもなく育った次郎のあり方を，たとえ心情的には共感を覚えることがあったとしても，どの程度若ものが理解できるでしょうか。この著作がなまなまとした歴史の流れを感じさせる名作であるだけに，かえって，この点が問題のように思われます。

現在，子どもたちが直面している難問は，たとえば，父親不在，狭い敷地に建てられた団地住いの息苦しさ，あまりにも目がとどきすぎる母親の過保護など，生活歴という点から考えれば，次郎の体験したものとは対極をなすような諸側面を抱えています。そして教育そのものが，文字から感覚的な視聴覚教育へと移りつつあります。そのこと自体がよいものであるか否かは，その変転の渦中にある私たちの判断を越えるものでしょう。そんな世相の中で，若ものたちはモーター・バイクを飛ばし，劇画やアニメの世界に没頭しつつ，かつては同じように，子どもからおとなの世界に変わる危機的な時代を，なんとか生き抜いているのです。

情緒的な問題に苦しむ現代の若ものたちとのつきあいが多いせいか，私もまた，ディスコをのぞき，富士スピードウェイのFIレースに熱中し，劇画を読む一人です。私の年令で彼らの心情を理解しようとすることは，そんなに易しいことではありません。しかし，精一杯に突っぱっている彼らの心の深層に，私はしばしば，信じられないほど美しい，情緒纏綿たる世界を発見することがあります。たとえば，先日，ある一過性の登校拒否症にかかっていた高校二年の男子の描いた絵をみる機会がありました。彼は心理療法の先生に命じられて，木のある絵を描いたのですが，最初はなんの変哲もないぼけた杉の木を一本，紙面の中央に描いただけでした。その絵のぼやけた輪郭は，彼のぼんやりとしたその時の様子にそっくりでした。次に盆栽のようにねじまがり，枝を丸く刈りとられた庭木を二回続けて描きました。ここまでは別にとりあげることもない非個性的な木の絵でした。

しかし，三枚目になると，木の数が多くなり，道が森の中に続いているような絵になりました。それから，根もとから切りとられた二本の切株の絵，そして，赤紫の背景に濃茶の枯木が立ち，そこに細い青い蔦がからみ，ぎざぎざに折れた枝先に，恐ろしいような半月がかかっている絵になりました。これらの絵をある程度，分析して考えることは可能ですが，その意味はともかくとして，私はその絵のもつ迫力に打たれました。やがて赤い家と青い木を二重の円で囲み，そのまわりにさらに波形の円を描いた中心を指向するような絵がでてきました。

このあたりから絵の調子が変わって，ほとんど少女趣味ともいえるようなやさしく美しいものになりました。たとえば，森の中の一本の木にぶらんこが下がっていて，その下に麦藁帽子がポツンと落ちているもの，あるいま一人の男子が木の枝にぶらさがっていて，赤い靴が片方だけ下に落ちているもの，などです。あるいは，アーチになったバラの垣根がずーっと続いて，その下を四角い踏み石が奥へ奥へと入ってゆくような構図もありました。このあたりの絵の色調の柔らかさと美しさは，本職の画家が描いたもののようでした。

やがてこの一連の絵は，一本の木を背にして，一人は上を向き，一人は下を向いている二人の少年，そして，手前に大きな木があり，向こうの丘にある建物へと道が続いていて，その建物を学校だと名指した後で，彼は突然描き始めた絵をまた突然にやめてしまって，無事に登校できるようになりました。私がここで申しあげたいことは，この高校二年の男子が再び学校に戻れたということではありません。彼らの中にはついに学校に戻らない子どもたちもいます。それよりも，バイクを飛ばし，ディスコで踊り，乱暴な言葉使いをするこれらの若ものたちの心の奥には，このような美しい世界があるということです。

普通彼らは，そんな世界をもっていることを自分でも意識していないし，また，その世界はただその子どもの表面的な世界をみていただけでは感じられません。この男子にしても，再び学校に戻ってからは，二度とこのような絵を描くこともなく，自分で表現してみせたその世界のことは，ちょうど夢でもみたかのように忘れてしまうことでしょう。たまたま子どもからおとなへと移り変わる危機的な状況の中で，この年齢の男子が心の深層に抱いている本来の姿を，彼はちらとのぞかせてみたのです。

特に『次郎物語』と関連がないにもかかわらず，ここにこの絵の話を述べた理由は，多感な子どもたちは，時代が変わり，一見まったく昔とは異なってみえるように思える彼らの心の奥には，次郎が感じたものと同じような純粋で美しく，悲しい思春期の想いが流れていることを伝えたいと思ったからです。こんな連中を相手にし，劇画やアニメに埋まって毎日を送っている私にとって，最初はたしかに『次郎物語』を読むことはいささか苦痛でした。しかし，私はその中に，昔も今も変わらない子どもの思春期の青年像を認めました。

現代の子どもたちは，ある意味で平和で豊かな，外からはあまり強制されない環境の中に住んでいます。たしかに，受験戦争や過度な競走社会の中で，子どもたちはそれなりに苦しみ，圧迫を受けていますが，次郎や，そして私などが体験した大きな時代の変動もなく，生活もかっての貧しい日本から比べれば，

はるかに楽になっています。高校，大学への進学率は昔では考えられないほど高くなり，ほとんどあらゆる高等教育を受ける道が開かれています。しかし，この一見，自主的な教育の蔭で，子どもたちは昔と同じような青春の苦悩を味わっているのです。ただそれは表層にあらわれる苦しみではないだけに，かえってとり扱い難いのです。

現代の子どもには，次郎のように波乱の多い幼時期や青年期を過ごすものは少ないでしょう。だから，これらの子ども時代の問題は，埋もれたままで，普通は意識されることも少なく，仮に表面にあらわれるとしたら，問題のないところに自ら問題を惹起する登校拒否や，理由のない自殺という形であらわれるものと思います。それはまた，非行や性犯罪という形であらわれるかもしれません。非行や性犯罪に走る子どもたちは，一見，手におえないような連中に思えますが，その心の奥には，先ほどの登校拒否の子どもと同じような純粋さ，美しさ，やさしさを秘めているのです。子どもからおとなになってゆく時の，不安と恐れが，この子どもたちの態度を逆に粗暴で投げやりなものとしているのです。

多感で情熱的な子どもこそ，未知の世界への不安と恐れをもつものであることを，私は『次郎物語』の中に読み，これまでの私の考えが，決して間違っていなかったことに確信をもちました。子どもたちの中には，次郎のようにすべてを投げかけて，師についてゆくタイプの子どもと，逆に自分の心の中に閉じこもり，一人でなんとか道を開こうとするタイプの子どもがいます。私はどちらかというと後者の方であり，今から考えると一人で，自分の殻をしっかりと固めながら，よくこの年まで無事に生きてきたものと思います。この性格的なタイプの違いが，『次郎物語』をもう一つ深く突っこんで考えられない私のもつ問題の一つです。そういうわけで，この補足もはなはだとりとめのないものとなりました。お許し願いたいと存じます。

最後に自分のことで恐縮ですが，最近，『ユング心理学からみた，子どもの深層』（海鳴社）という本を書きました。これを読んで頂ければ，もう少し私の考えをわかって頂けるものと思います。本年度は幼時期と青少年の問題について，新しい観点から四・五冊，本を書くつもりでおります。なお，私が子どもたちに勤めたい本としては，『グリーン・ノウ物語』L・M・ボストン作（評論社，小3・4年以上）『ホビットの冒険』（岩波書店小5・6年以上），『指輪物語』（評論社）以上J・R・R・トールキン作，『ゲド戦記』ル・グィン作（岩波書店）劇画では，ますむらひろし作『アダゴオルは猫の森』などです。